

人麿長歌における〈神話〉と抒情

森 朝 男

柿本人麿の作品中には、神話に関する叙述をその内部に含むものが、いくつもある。人麿に、〈神話〉が、どういふかたちで存在したか、無論、詩の問題として——といふのが、いまここに考へてみたい問題なのであるが、この場合、最初に一言せねばならぬことがある。人麿にとつて神話は、単に素材として客観的に存在するだけのものではない。彼の場合、いまま少し生き生きと、それは現存的に、有る。だからその場合に、私は〈神話〉と括弧を付して言はうと思ふ。

以下に私は、人麿の三つの長歌における神話叙述をみる。「近江荒都歌」における檀原聖代に関する叙述と、「日並皇子殯宮挽歌」における、天孫の瑞穂国支配の来歴に関する叙述と、いま一つ、「狭岑島挽歌」における「神の御面」といふ、二神国生みの神話に関する表現とである。

近年、人麿の抒情の構造を、人麿の意識した時間のありやうから捉へようとする、興味深いいくつかの試みがなされてゐる。中西進氏は「近江荒都歌」「安騎野遊獵歌」などを捉へて、人麿の詩性の基本として、「喪失の時の意識」といふものを指摘され、平野仁啓

氏は人麿の時間意識を論じて、原初に回帰する神話的時間と、現実の流れ去る時間との「せめぎ合う時間の狭間から、人麻呂の歌風のさまざまの特徴が生まれてきた」⁽²⁾ことにふれられ、また桑川光樹氏は、人麿における〈時間〉を表現のうへに検討されて、「ある根源的な存在から、現実が不条理にも遠ざかり行く姿を、人麻呂は『すべなき』⁽³⁾思いで見つめていたにちがいない」と結論される。大分前になるが、私もほぼ同様の問題を考へて、人麿の歌語「過ぐ」と、逆接の接続詞「ど」「ども」などを中間に挿む短歌の修辞法とを手がかりに、直線状に伸びてゆく時間への恐怖を、人麿の詩的特質として指摘したことがある。⁽⁴⁾

本稿もまたこれらと重なりあふ問題を追ふことになる。ただここでは私は、問題を〈神話〉の方から考へていつてみたい。人麿の三つの長歌において、詩の問題として、〈神話〉はどのやうに有つたか、といふのが、あくまで私のここにたてた問題の軸だ。従つてまた、時代や、人麿の歌人としての立場・経歴といった興味深い背景論には、私はここでは必要以上にたち入らない。三つの作品の成立順序も、考慮しない。

一、挑まれる〈神話〉——近江荒都歌

王禰^{たまき} 畝火の山の 榎原^{かきはら}の 日知^{ひぢり}の御代ゆ 生れましし 神の
 ことごと 樛^{つが}の木の いや継ぎ^{つぎ}継ぎに 天の下 知らしめしし
 を 天^{そら}にみつ 大和を置きて あをによし 奈良山を越えい
 かさまに 思ほしめせか 天離^{あまざか}る 夷^{ひな}にはあれど 石走^{いはばし}る 淡
 海の国の ささなみの 大津の宮に 天の下 知らしめしけむ
 天皇^{すまみ}の 神の尊の 大宮は 此処と聞けども 大殿は 此処と
 言へども 春草の 繁^{しげ}く生ひたる 霞立ち 春日の霧れる も
 もしきの 大宮処 見れば悲しも (巻一・二九)

「榎原の日知の御代ゆ」と人麿はいふ。ここでは、初代神武天皇の榎原建都のことが、神聖なる〈祖型〉としての意義を含んで、いかめしく重い、と私はみる。「榎原の日知の御代ゆ 生れましし 神のことごと 樛の木の いやつぎつぎに 天の下 知らしめししを」と、人麿は言つてゐて、それは下文をみれば、神武以来の歴代天皇が、継ぎ継ぎに大和で天下を統治された、といふ意味に、当然なるであらう。「知らしめしける」の別伝「めしける」によつたら、そのことは一層明らかだ。「榎原の日知の御代」とは、従つてここでは、大和における建都の〈祖型〉——M・エリアーデのいふ〈ヘアーケタイプ〉を私は念頭に置いてゐる——であつた。大和の。榎原なのだ。

この叙述が史実に違ふことは、すでに覆ふべくもない。帝都は大和にばかり限られてはゐなかつた。難波高津宮・難波長柄豊崎宮な

ど。万葉にはどちらを指したか、「難波天皇」といふ呼称さへ見えてゐる。かといつて、これは単に、少数の例外を無視しておほまかに述べたもの、といふわけでもない。西郷信綱氏が指摘されたとはり、大和とそれ以外の地とでは、「質的に大きなちがいがあつたわけ」だ。ここではその〈質〉が問題にされてゐる。大和は帝都の置かれるべき地、国の内でことに選ばれた聖なる地、である。それが前提になつてゐる。「天離る夷」に都は有り得ない。

この前提は何によつて保証されるか。言ふまでもなく、初代神武の大和榎原における創業の〈祖型〉によつてだ。〈祖型〉は聖なるものとして反復されねばならぬ。古代人の心意は、〈祖型〉の反復のうちに歴史をおしこめようとする。その心意の生み出した古代論理が、この叙述を支へてゐる。だからこれはいはゆる歴史ではない。「日知の御代ゆ……いやつぎつぎに」と人麿は言つてゐて、叙述は歴史的だが、歴史的叙述でありながらそれ以上の意味を、この文脈は持つてゐる。いはば、神話的時空あるひは祭式的時空ともいふべきものが、ここには仮構されてゐるのだ。「生れましし 神のことごと 樛の木の いやつぎつぎに」といふ莊重な表現によつて、「榎原の日知の御代」は、単なる過去の歴史の初発としてでなく、絶えず再生され、反復される、現在的に有る〈神話〉とされてゐる。あるひはかう言ひかへてもよいだらう。この歌の冒頭十句、「知らしめししを」までは、〈神話〉なのだ、と。平野仁啓氏は、この歌の前半部には神話が表現され、後半部には現実の廃墟が表現されておゝり、それぞれ原初に回帰する神話的時間と現実における流れ去る時間とに対応してゐる。」⁽⁶⁾と言はれる。私は後述するやうに、一首を強いて三分してみたい思ひを禁じえないのだが、冒頭部分に

ついでには、平野氏の所説に全く異論がない。この部分は、私見によれば、後にふれる「日並皇子殯宮挽歌」冒頭部の、例の難解な複数主語の一体化の文脈に通ふ。

次に、この十句の、後段への接続をみよう。「知らしめししを」と逆接を配するのが原文。異伝めしけるは散文的で悪い。そして大和を捨てて近江に遷都する天智天皇の営為が、道行きの句を含んで。「いかさまに思ほしめせか」といふ、例の問題の句を含んで。「を」と「いかさまに思ほしめせか」とは、ともに協調の関係にある。近江への遷都は、〈神話〉を破るものとして、逆接的に提示されるのだ。

人麿の声調は息長く途切れないが、私は「天の下 知らしめしけむ」あたりまでを第二段として、故意にそれ以下と区別してみた。「けむ」は連体形だが、ここに休止を認めるのが、ほぼ通説だとみてよい。この第二段、道行き形式だから、ここに至つていよいよ現実の時間が流れ出す、といった感を否めない。新しい何ものかが始まる。地名の一一に枕詞を冠し、叙述はゆつくりと進むが、一首中最も叙事詩的な部分だ。

「いかさまに思ほしめせか」にふれねばならないが、これについて述べられた諸説のうち、私はやはり、最も微妙を捉へてゐる杉山康彦氏説に従ひたい。すなはち、契沖のいふ「凡慮の慮りがたきよし」(代匠記精撰本)の背後に、「何か不安なばかり知れぬ懼れといったものがまとひついた言葉だとして、結局「天皇の行為は非難されてゐるのでなく逆に、凡慮のはかり難きもの、懼れ多いものとして神格化され、賞讃されていると同時に、その背後には得体の知れない不安、懼れがこめられている。」とみるものである。讃仰と不

安の複合、とても言つたらよいか。神話的秩序に挑戦する者への感情だ。この二句を受けて人麿は「天離る 夷にはあれど……ささなみの 大津の宮に 天の下 知らしめしけむ」と言つてゐる。「赤駒の匍匐ふ田井を都となしつ」(巻十九・四二六〇)、「水鳥の多集く水沼を都となしつ」(同四二六一)などと同じ筆法だから、これは讃仰の表現とするのがよい。従つて「いかさまに思ほしめせか」を、遷都を「少し謗れる」かとする契沖のもう一つの案に、私は従ひえない。天智紀の、遷都に対する民衆の不満を暗示する記事も、ここには関係しない。なるほど事実はさうあつたかも知れぬが、人麿はそれを歌つてはゐない。詩の言葉は、事実を離れて別の意味連関を仮構する。讃仰と不安だけがこの場合むしろ末尾の悲傷によく合致して、この歌の詩的内容を純一にする。

天智天皇の遷都の営為が、讃仰と不安とを以つて遇せられてゐるとすれば、それは神話的秩序・軌範に挑む英雄的な営みとしてあることになる。冒頭部の〈神話〉は、さうしたもののための逆接的前提である。これは中段の讃仰と不安にしたたかな質量を与へ、後段の廃亡悲傷に、人間史の運命的悲哀の色を添へてゐる。

この歌における〈神話〉は、結局、挑まれる〈神話〉だといへるが、挑みかける側のものは、ここで生きたる〈神話〉に直接対置され、それゆゑにはば人間史の総量に見合ふ重みを包蔵しつつ、末尾の抒情の奔騰を実現してゆく。

二、自壊する〈神話〉——日並皇子殯宮挽歌

天地の 初の時 ひさかたの 天の河原に 八百万 千万神の

神集ひ 集ひ座して 神分り 分りし時 天照らす 日女の命
 天をば 知らしめすと 葦原の 瑞穂の国を 天地の 寄り合
 ひの極み 知らしめす 神の命と 天雲の 八重かき別きて
 神下し 座せまつりし 高照らす 日の皇子は 飛ぶ鳥の 浄
 の宮に 神ながら 太敷きまして 天皇の 敷きます国と 天
 の原 石門を開き 神あがり かがり座しぬ わご王 皇子の
 命の 天の下 知らしめせば 春花の 貴からむと 望月の
 満はしけむと 天の下 四方の人の 大船の 思ひ憑みて 天
 つ水 仰ぎて待つに いかさまに 思ほしめせか 由縁もなき
 真弓の岡に 宮柱 太敷き座し 御殿を 高知りまして 朝ご
 とに 御言問はさぬ 日月の まねくなりぬる そこ故に 皇
 子の宮人 行くへ知らずも (巻二・一六七)

はじめに難解な前半部の文脈について一言せねばならぬ、傍線を
 ほどこしたDは、日並であることに誤りない。その前のCの主語は
 天武か日並か、二説に大別される。しひて別けるなら私は天武説を
 採る。「飛ぶ鳥の 浄の宮に 神ながら 太敷きまして」といふあ
 たりは、日並よりもやはり天武の姿とすべきだらうし、「高市皇子
 殯宮挽歌」を合せみても、天武を歌ひこむのが、人麿の姿勢であつ
 たと思はれる。とするとCの、文脈中の主語Aは、天武となるが、
 Aはまたその前の部分からの続き方からして、当然皇孫ニニギノミ
 コトであらねばならぬ。従つてAは皇孫と天武とを一体化した表現
 だ。またCの主語をかやうに天武とすれば、Bは日並以下、後の世
 々と天皇たちとすべきだらう。無論伊藤博氏が述べられるとほり、
 「しひて人を想定するとすれば、天武天皇の皇太子たる草壁皇子を

思ふのが自然」であつて、日並をその中心に考へての表現である。
 Bを先帝たちとして、「敷きます国」を高天原とする説もあるが、
 私は従へない。持統天皇とする説も、表現の持つ詩的秩序を破壊さ
 せる。この表現が持統をも含みうるにしろ、単独に持統を指したも
 のではない。

さてところで最近、橋本達雄氏に、Cの主語として天武・日並の
 重層を考へようとする新説がある。氏によればこの歌の文脈は、
 「天照大神が主格となつてニニギノミコトを降し、それに天武と日
 並が重層し、ただちに天武と日並の行動が二重うつしに進行し、
 『わが王皇子の命の 天の下知らしめせば……』以下に明確に日
 並が主格として登場することとなる。私は前半部の叙述に天武天
 皇の影を強く感ずるものであるが、この橋本氏説には一段と興味を
 そそられてゐる。氏説も、日並が天武と二重うつしになることの意
 味を考へようとしたものであり、天武の登場に注意を向けてをら
 れる。

難解な文脈上の問題点については、かやうに主格の重層性をみる
 ことで、問題そのものが徐々に解消されてきてゐる。皇孫と天武、
 皇孫と天武と日並、といふふうにある。さうした重層性、二重う
 つし、複数主語の一体化といったものを、ここでは見きはめておい
 て、本論に移らう。

皇孫の天降りが直ちにその遠い末裔である天武と重層し、さらに
 橋本氏説に従へば、当面の日並とまで重層するといふ、この文脈の
 意図するものは、一体何であらうか。代々の天皇は、皇孫として同
 じ威霊を受けて復活更新するものだから、信仰的にはみな同一人格
 なのだ、と折口信夫はこの叙述法を例としていふ。さういふことな

のだとすれば、この叙述法を支へるのは、やはり祭祀の論理・神話の論理であつたこととならう。そして皇孫に天武(さらに日並)のみが重層させられてゐるのでなく、これは皇孫以来の皇統譜上の全ての天皇たちが、隠れたかたちで重層させられてゐることともなる。ここでは神聖なる皇統譜が語られてゐるのだ。しかもそれは神話の論理を以つて。

「近江荒都歌」の冒頭部の叙述にこれは類同する。いや、これはかれに倍して、生きた、現在のにある〈神話〉を、語る文脈なのだといへよう。

そこで問題なのは日並の位置である。この歌で日並は、半ば〈神話〉のうちに呼びこまれ、とりこまれながらも、危ふく自立する微妙な存在としてある、といふことができよう。高天原より降臨した皇孫と重層させられた天武に、日並は半ば重層させられつつ、「吾が王 皇子の命」以下の文脈に到つて一応自立する。しかしその薨去のことはいつまでも明言されずに待たされる。「天の下 知らしめしせば」と、かなへられなかつた即位のことが仮想され、やうやくに語られたした殯宮のことも、「宮柱 太敷き座し 御殿を 高知りまして 朝毎に 御言問」ふ——といふふうには、あたかも生きてあるかのやうに語られる。生きて帝位に即くことが、この場合、冒頭以来連続と続いてきて、あはや日並までもそのうちにとりこまうとした〈神話〉の、必然的膨脹のありやうなのであつた。この歌の〈神話〉は、歌の冒頭部分を核として、叙述の末尾にむけてどこまでも膨脹しようとする。これはある意味で「近江荒都歌」の場合と反対のありやうを見せた〈神話〉である。挑まれてやむのでなく、いつまでも守りとほされようとする〈神話〉だ。

しかし、膨脹するにつれて、この〈神話〉は、徐々に色褪せてゆく。ここでも〈神話〉は崩壊する。ただし挑まれてではなく、守られようとして、後向きにずるずると崩壊に落ち込んでゆくのだ。そしてその果てに悲傷が待つ。——この〈神話〉は、自壊する〈神話〉だといへばよいだらう。挑まれるのでなく、哀惜されつつ徐々に内部から崩壊してゆく〈神話〉だ。だからこの歌の「いかさまに思ほしめせか」は、もつばら受動的である。さうして末尾の三句「そこ故に 皇子の宮人 行くへ知らずも」は、うすれつつも地上を這ひのびる霧のやうに、膨脹してきた〈神話〉が、とりこみ余した最後のものだ。〈神話〉の外に落ちこぼれたこの三句は、〈神話〉を哀惜して途方にくれる。この歌の抒情は、哀惜のそれだ。自壊する〈神話〉は、哀惜される〈神話〉であつたことになる。

三、遠のく〈神話〉——狭岑島挽歌

王藻よし 讃岐の国は 国からか 見れども飽かぬ 神からか
 ここだ貴き 天地 日月とともに 満りゆかむ 神の御面と
 継ぎ来たる 中の水門ゆ 船浮けて わが漕ぎ来れば
 時つ風 雲居に吹くに 沖見れば とる波立ち 辺見れば 白
 波さわく 鯨魚取り 海を恐み 行く船の 梶引き折りて を
 ちこちの 島は多けど 名くはし 狭岑の島の 荒磯面に い
 ほりて見れば
 波の音の 繁き浜辺を 敷栲の 枕になして 荒床に 自伏す
 君が 家知らば 行きても告げむ 妻知らば 来も問はましを
 王梓の 道だに知らず おぼほしく 待ちか恋ふらむ 愛しき

妻らは

(巻二・二二〇)

いま便宜三段に分けて掲げた。この歌はいはゆる行路死人歌である。この種の歌は、一般に死人とその家郷・家人(特に妻)との交渉の杜絶を憐れむことを、中心の表現内容とする。この一首も全くその形式を逸脱するものではないのだが、特異なのは、前・中段の、死人に出会ふまでの作者自身に関する長い道行き文だ。ことに前段には国土讚美の寿詞的表現を配してゐて、一首の詩としての統一上、これがどうした連関を主題に対して持つのか、といった疑惑がまづ我々を捉へる。

例へば右の件に関して『万葉集全注釈』(増訂版)は、次のやうにいふ。「雄大な構成であるが、石中の死人を悼む歌としては、必要でなく、ただ序としての意味を有するだけである」と。人麿の長歌は、一般にかうした重々しい序を特徴とするのであつたが、序も、一首を詩としてみる場合には、おのづと一定の意味や効果を持たねばならない。さうした視角からこの一首の前段の意味を問うた論も、実はある。いまその紹介を避けるが、それらはいづれも優れた詩論である。が、それらの多くは前段を後段の主題に結ぼうとしたものであつて、三段を変化・展開の相において捉へたものは、管見の限り、ない。

私はいまこの三段を、変化・展開の相において捉へてみたい。多くの人々が、この一首を行路死人歌以上のものとしては、読まなかつた、と私には思はれる。三段を変化・展開の相において捉へ直すことによつて、この歌は単なる行路死人歌以上の、人麿的主题を内包するものであることが、分る。三段の展開は道行きの起点↓経過

点↓終着点といふ順序に添うてゐる。それぞれがどんな内容を含み、その展開が、全体としてはどんな意味を持つか、考へてみよう。

前段。道行きの起点「中の水門」^{みなと}が、荘嚴な寿詞の文脈に絡まれつつ提示される。ここでも不思議な文脈上の短絡がなされてゐる。「天地 日月とともに 満りゆかむ 神の御面と 継ぎ来たる」は、冒頭の主語「讚岐の国」に対する述語であるべきはずなのに、そのまま「中の水門」^{みなと}の修飾語となつてしまふ。「神の御面」は、古事記上巻の二神国生み神話中の一節「次に伊予の二名の島を生みき。此の島は身一つにして面四つ有り。……」を受けたもので、この「面四つ」は、この島の四国すなはち伊予・讚岐・粟(阿波)・土佐を指す。だから「神の御面と 継ぎ来たる」ものは、嚴密にいへば「讚岐の国」であるべきなのだ。つまりこの文脈は、「中の水門」といふ道行きの起点、を寿詞的に表現するために、半ば作為的にそれと「讚岐の国」とを同一化した、ないしは重層させたものだといへよう。「日並皇子殯宮挽歌」に見た主格の重層・二重うつしに近いのだ。

人麿はかうした作為によつて、「中の水門」^{みなと}と讚岐の国とを重層させ、かの神話的始源の充足を、今に継承する至福の原郷として、「中の水門」といふ道行きの起点を描くことに成功した。「継ぎ来たる」はひとまづ「継承してきた」の意と解しておく。とまれ道行きの起点は、至福・充足を今に継承する、生きたるへ神話の地境として、歌中に構築された。船はそこから出る。

中段。道行きの中間地点。風浪荒き海上だ。表現は叙事詩的になる。「行く船の 梶引き折りて」——漂流か、破船か、不安の船行

きの叙述だ。そして「をちこちの 島は多けど 名くはし 狭岑の島の」と、再び寿詞的な表現（「群山有れど とりよろふ 天の香久山」等と同じ。寿詞の常套的表現だ。）が来る。文脈上の一つのうねり。〈神話〉的原郷の回復が期待されてゐる。ところがさうして漂着した島はどうであつたか。

後段。道行きの終着点としての島。死人の登場によつて、中段末尾の期待はうらぎられ、悲傷に到達する。

結局この歌の三段は、充足↓不安↓悲傷と展開する三段だといへる。あるひは、この道行きは、〈神話〉の港↓叙事詩の海↓抒情詩の島といふ展開の道行きだつた、といつてもよいだらう。確実にいへることは、この道行きが、〈神話〉から徐々に遠のいてゆく、流離のそれであつた、といふことだ。この歌の〈神話〉とは、遠のく〈神話〉だ。

ところで右の三段の展開は、前・中二段の末尾が「……ば」といふかたちで後続の段に転ぜられつつ実現される。このことが、この歌の場合特に重要な点である。「ど」「ども」ではなく、順接の「ば」。この歌の〈神話〉はせめぎあひのうちでない。自然に静かに遠のいてゆくのである。挑まれて終るのでも、強く哀惜されるのでもなく、むしろ静かに遠く追憶されてゐるともいはいはうか。全体を覆ふ一種のおほらかさは、そこに由来するのだ。しかしそれだけに、この〈神話〉は遠い隔たりを感じさせる。

私はこの行路死人歌が、作者自身の道行きを叙述中に含み持つといふ点で、他のそれときはだつて異なることに、特に注目したい。人麿はこの一首を、単なる死人哀悼の一首に終らせなかつた。哀悼の主題は増幅され、人麿の心の奥の普遍的な主題と交響させられたの

だ。遠のく〈神話〉のこなたに、死人の死は、人間の運命の悲哀として見据ゑられてゐる。この点は、私に旧稿がある⁽¹¹⁾ので、それに譲りたい。

人麿の詩的世界は、多くの場合、悲哀とその対極とが作りなす強力な磁場のうちにある。右に見てきた〈神話〉もまた、その、悲哀の対極、であつたといひえようか。それはあるひは挑まれて崩れ、あるひは自づから崩れし、ときにはまた静かにゆるやかに遠のきもする。そしてさうした磁場の動揺を機に抒情が始動する。右に見た三つの〈神話〉は、いづれも共通して、詩の問題として、そのやうに有る。三者の微妙な相違は、基本を同じくしつつ様々に試みられた一種の変曲である。初めに私のたてた問題には、ひとまづそのやうな答が与へられるであらう。

が、その答はもうそんなにま新しくはない。むしろ重要なのはその先だ。人麿の主題はこれらの歌の場合、いづれも現実の悲哀の方にあつて、〈神話〉はそれとの関係において表現されてゐる。だからこれらは、一般に〈神話を語る〉といふこととは別様の文脈・ことばのうちにある。彼の〈神話〉は、詩の中のものなのである。それが崩壊し遠のくことの迫真性^{レトリック}のために、〈神話〉が生き生きと現存的に有らしめられたこと、また微妙な変曲が可能であつたこと等は、いづれも詩のことばが持つ一種の創造性に由来するといへよう。さうした自在なことばとは、ある意味で神話の生命の危機が可能にしたものではないか。〈神話〉が現存的に有らしめられつつも、遠のき崩壊してゆくものとして存在する。この近くて遠い微妙な距離感覚は、実は神話の生命の危機によつて自立しはじめようと

する、新たなことばを以つて、逆に神話の生命を補完しようとする営みによるものではないか。

それは神話の再編が企図されつつある、この時代の文明史的位相に關はつてもゐたはずである。

注(1) 『柿本人麻呂』Ⅲ

(2) 「柿本人麻呂の時間意識の構造」(文芸研究28)

(3) 「試論・人麻呂の時間」(論集上代文学4)

初期万葉歌と筑紫

はじめに

万葉集の時代を四期に区分して考えることが、一般に行なわれるようである。これに従えば、本稿で考察しようとするものは、この四期区分の第一期、即ち舒明天皇(五三)の代から壬申の乱(六三)までのいわゆる初期万葉と呼ばれている時期のものである。ここでは、この初期万葉歌を中心に記紀の歌謡を含めて筑紫とのかかわりに就いて考えてみたい。

本稿で初期万葉歌(書紀歌謡も含む)と筑紫とのかかわりを考えて

(4) 「時間への恐怖」(国文学研究39)

(5) 『万葉私記』第二部

(6) 2に同じ

(7) 「人麿における詩の原理」(有精堂版資料叢書『万葉集』I所収)

(8) 「人麻呂の表現と史実」(同右)

(9) 「人麻呂の意図」(上代文学22)

(10) 全集第一巻・四二二―他

(11) 「柿本人麿『狭岑島挽歌』小考」(まひる野、昭49・7)

林 田 正 男

みようとしたのは、正に安西均氏『私の日本詩史ノート』の発言に示唆されたことによるものである。それは、例の斉明天皇七年正月(六三)百濟救済のために天皇は西征の途につかれた。同七月斉明天皇朝倉宮で崩御、天智称制二年八月、日本の遠征軍白村江で大敗す、などの一連の事件に關係するものである。氏は「万葉集で親しい斉明、天智のちの天武、持統、額田王などが、すくなくとも二年間滞在した筈なのに、九州における彼らの歌が万葉、書紀ともに皆無であることへの不思議」と疑問を提出し「朝鮮出兵に否定的な力の存在」があったのではないかと暗示に富む疑問を提出されている。こ